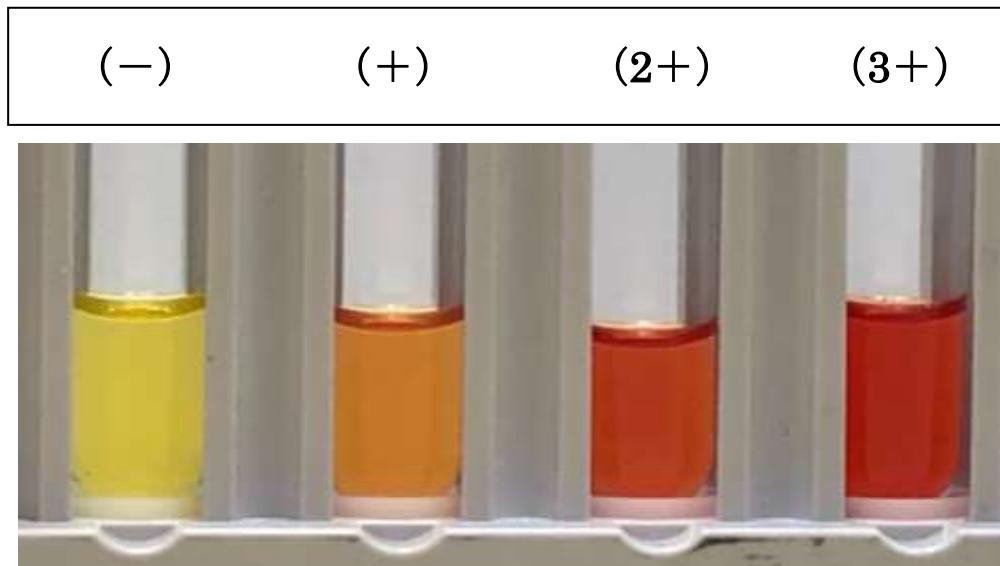


検査センター トピックス

第132号 2022.5

溶血があるとどのくらい高くなる？

生化学検査では採血時の状態や保存によって溶血することがあります。生化学分析装置では血清の溶血情報を判定しており、(-)、(+)、(2+) (3+) の4段階に分類しています。



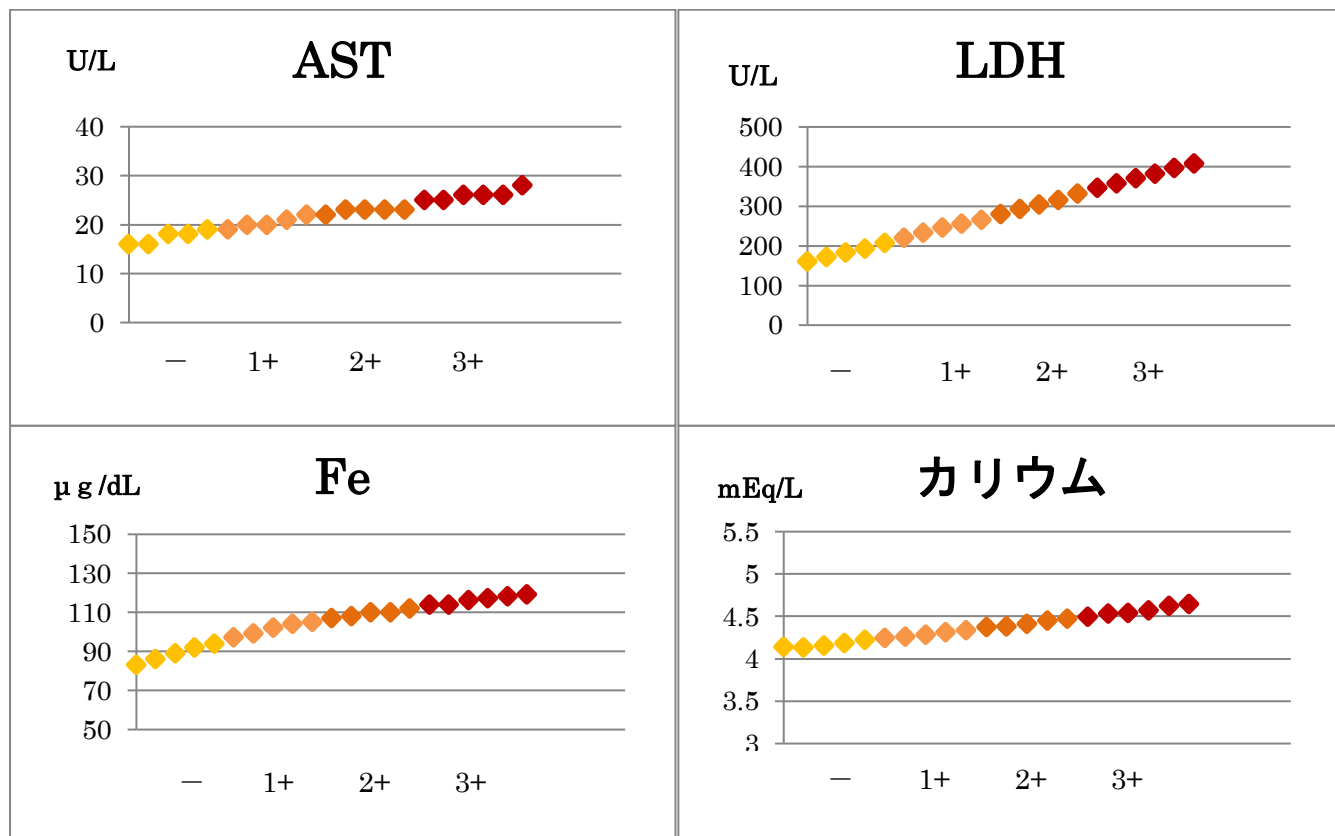
LDH、AST、カリウム、血清鉄は赤血球中に多く含まれるため溶血の影響を特に受けやすい。

	溶血判定	影響率	結果値
LDH	(+)	+50%	↑
AST	(2+)	+40%	↑
カリウム	(2+)	+6%	↑
血清鉄	(2+)	+30%	↑

検討の結果、上記項目は溶血の影響が認められた為、コメントをつけさせていただきます。

検討の詳細な結果は裏面をご覧ください

溶血の影響が認められた項目のデータを示します。



溶血を防ぐためには

- ◇ 皮膚の消毒後は、消毒液が乾燥するまで待って穿刺を行う
- ◇ 23G より細い針で採血しない
- ◇ シリンジ採血した場合、内筒を強く引かない
- ◇ 分注はゆっくり行い、転倒混和の際泡立てない
- ◇ 採血管は立てて静置する

採血のポイント

カリウムは駆血帯で長時間強く圧迫して採血すると、圧迫により細胞内から血液中へ流出したり、採血の際に手を開いて再び握る動作（クレンチング）を行うと筋肉細胞内から流出し、カリウムの値が上昇します。また、白血球や血小板が異常高値である場合、凝固する過程で流出するためカリウムの値が上昇します。（偽性高カリウム血症）